（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	川本　徹
論文題目	Representing the American Railroad and Monument Valley: Studies on the Invention and Future of the Cinematic Frontier （アメリカの鉄道とモニュメント・バレーを表象すること―映画的フロンティアの創造と未来に関する研究）		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、アメリカ映画とフロンティア概念の重層的関係を、鉄道とモニュメント・バレーの表象に照準を定めて究明したものである。鉄道とモニュメント・バレー（アリゾナ州とユタ州の境界に位置する岩石砂漠地帯）は、それぞれ文明と荒野の代表的形象として、19世紀のアメリカ西部のフロンティアを舞台とする西部劇ジャンルのなかで、揺るぎない地位を獲得している。本論文では、両者のイメージをジャンルへの導入地点にまで遡って精読するとともに、フロンティア概念の多様な展開とそれに伴う西部劇とSF映画のジャンル的混淆を視野に、それらが核兵器や地球のイメージと結びつく瞬間を捉え、その歴史的意義を探究した。論文副題を「映画的フロンティアの創造と未来に関する研究」と銘打った所以である。

構成に関しては、序論と結論を除く全五章を、文明と荒野を両極に置く西部劇そのものの構造を反映させる形で、以下のように配列した。鉄道の表象を論じた二つの章を論文の前半（第1章と第2章）に、モニュメント・バレーの表象を扱った二つの章を後半（第4章と第5章）に置いた。鉄道とモニュメント・バレーをめぐる議論は、第2章と第5章でそれぞれ核兵器と地球をめぐる議論へと拡大する。さらに論文の前半と後半の蝶番として、文明と荒野の媒介者たるカウボーイの表象を論じた章を全体の中間（第3章）に置いた。より具体的な論述内容は以下の通りである。

序論で当該分野の研究史を概括したのち、第1章ではエドウィン・Ｓ・ポーター監督の『大列車強盗』（1903年）を取り上げ、列車表象との関連から本作の映画史的位置付けを再考した。1980年代以後、初期映画学者や映画ジャンル論者は本作を西部劇ではなく紀行映画（列車映画）であると主張してきたが、こうした見解は慎重に再検討されるべき側面を孕んでいる。先行研究の問題点を浮き彫りにしたのち、本章は『大列車強盗』のテクストにいま一度目を向け、その象徴体系と特異な上映形態、および両者の相互作用を考慮に入れた複合的な分析を行った。そしてこの作業を通して、小説とも演劇ともその本源的性質を異にする映画媒体ならではのフロンティアとの関係性に光を当てた。

第2章では、第1章の議論を受けて『大列車強盗』以後の作品を対象に西部劇における鉄道の表象史を辿り直した。この論脈でさらに、19世紀の鉄道建設と20世紀の核開発、オールド・フロンティアとニュークリア・フロンティアの連続性を示唆する異色作を取り上げ、アメリカ西部とテクノロジーの相関関係をフクシマ以後の環境論的視座から再考した。特に重点的に論じたのは、鉄道とモニュメント・バレーの組み合わせで始まり、モニュメント・バレーとキノコ雲の組み合わせで幕を閉じるという、一見荒唐無稽に見えながら、しかし実際にはアメリカ西部の隠れた歴史を浮き彫りにした『トイ・ストーリー３』（2010年）の冒頭シーンである。

第3章では、荒野と文明の媒介者たるカウボーイの表象を彼らの入浴シーンに注目して分析した。西部劇の入浴シーンには、カウボーイが帽子を被ったまま入浴するとか、浴槽のなかから拳銃を放つといった奇妙な約束事が認められる。荒野と文明がジ

ャンルの論理上、男性空間と女性空間と規定されていることを踏まえ、本章では上述の約束事をカウボーイのジェンダー的葛藤の表れとして読み解き、さらには卓越した西部劇監督（サム・ペキンパーやクリント・イーストウッドら）が一連の約束事にいかに捻りを加え、ハリウッド映画の男性表象をいかに刷新したのかを跡付けた。

第4章では、20世紀中葉までほぼ無名の存在であったモニュメント・バレーが、西部劇によって「発見」され、アメリカ西部の象徴的風景にまで登り詰めたプロセスを、19世紀アメリカにおける風景画流行の地点にまで遡って調査した。その上で、ジョン・フォード監督の描くモニュメント・バレーを従来とは異なる観点から精読した。「西部劇の神様」として知られながら、実人生においてはむしろ海との関係が深かったフォードは、代表作『捜索者』（1956年）のなかで、モニュメント・バレーの内に大小の島々の浮かぶ海のイメージを見出した。本章ではこの仮説を仔細に検証するとともに、『捜索者』における風景表象と人種表象の驚くべき共鳴作用の解明を試みた。

第5章では、スタンリー・キューブリック監督のSF映画『2001年宇宙の旅』（1968年）とシネラマ西部劇『西部開拓史』（1962年）を比較考察した。両作品はともにラルフ・ウォルドー・エマソンの眼球譚を思わせる空撮シーンを含み、さらにその一部にモニュメント・バレーを登場させるという共通点を持つ。しかし一方で当該シーンで表明される自然観においては両作品は好一対を成す。従来見過ごされてきたこのコントラストを手掛かりに、本章はさらに議論の照準を地球内の自然から地球そのものへと拡大し、光り輝く胎児がこの青い惑星を見下ろすという『2001年宇宙の旅』の有名なエンディングを再解釈した。西部開拓時代と宇宙開拓時代における人間中心主義的自然観の一貫性と、その超克の可能性がこのエンディングには等しく刻印されている。

結論では、議論の要点を振り返るとともに、第5章で論じた『西部開拓史』を例として、19世紀以後のフロンティア概念の変遷史をいま一度辿り直した。

（　続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、「映画」という20世紀最大の表象ミディアムと「フロンティア」というアメリカ合衆国の歴史的概念の関係性を独自の視点からリサーチ、考察、照射した優れた学際研究である。

本論文最大の考察意義は、アメリカ合衆国におけるフロンティア概念の多様な展開を視野に、世界中で製作されはするものの、基本、アメリカ国家独自のジャンル映画「西部劇」に潜む、惑星（地球外）規模の問題機制を抽出した点にある。19世紀、鉄道産業の隆盛とともに西部のフロンティアを開拓したアメリカ合衆国は、20世紀以後、航空宇宙産業を発展させ宇宙のフロンティアを開拓すると同時に、軍事科学技術のフロンティアと言うべき核開発を他ならぬ西部の地で進めた。一方でハリウッド映画産業は東西冷戦期イデオロギーをSF映画ジャンル（開拓者精神を西部劇と共有する隣接ジャンル）に反映させ、莫大な利益を上げた。以上の諸点を踏まえ、西部劇ジャンルを広義のフロンティア概念の下で再考した本論文は、グローバリゼーションの加速化する21世紀にふさわしいアメリカ研究の成果として括目に値する。

無論、海外の先行研究に同様の視点が皆無だったわけではないが、そのテーマの広大さゆえに、議論が往々にして抽象的な水準にとどまっていたのに対して、本論文はそうした陥穽を回避すべく、以下のような独創的な方法論を採用した。すなわち映画的フロンティアの二大構成要素たる鉄道とモニュメント・バレー（モーション・ピクチュアとも称される映画ミディアムにおいて、画面内のモーション=エモーションを際立たせる上で特権的な被写体／物語空間）を中心的な主題にすえ、両者の西部劇への導入とSF映画への越境を同時に考察するという方法論である。国家的映画産業とフロンティアの多面的関係を鮮明に浮かび上がらせるには、誰もが西部劇と聞いて思い描くイメージの根本的再考が至極妥当だとする筆者の主張は、きわめて説得的である。

以上に見た本論文のオリジナルな着眼点と新規アスペクト、知的射程の広さと方法論上の独創性は、アメリカ西部における鉄道建設と核開発というこれまで別個に論じられて来た事象の内に、連続性と共通性を見出した第2章に明瞭に体現されている。ここで筆者は19世紀にアメリカ西部の苛酷な荒野（自然）を鉄道で切り拓いた経験こそが、核開発を含む以後の米国のテクノロジーの進歩へと延長するという仮説を、西部劇とその関連映画、さらには映画以外の多数の視覚的テクストの引用を交えて立証した。かつて19世紀後半に視野を限定していたアメリカ西部の歴史研究は、1980年代以後、その視野の拡大を図ってきたが、本論文は上述の第2章と宇宙開拓を論じた第5章を中心に、その歴史研究の成果と視覚テクストの細部分析を随所で弁証法的に止揚し、アメリカ研究として高い水準での学際性を発揮している。

無論、本論文は映画学それ自体としても、きわめて高い水準に達している。フロンティア概念によって一貫性を賦与された枠組みのなかで、西部劇映画史上有名な傑作映画に従来とは異なるアスペクトから新規なる解釈を施したことも、本論文のもう一つの意

義として特筆に値する。海外の西部劇映画研究では近年、極端な細分化が進み、有名作品についての革新的リサーチが少なくなっている以上、これは驚くべき成果であり、本論文が近い将来、当該領域に国際的なインパクトを与えることが期待される。第1章では、一般には「映画史上、最初の西部劇」として知られながら、初期映画研究の泰斗チャールズ・マッサー（現イェール大学教授）やその追随者たちが、それを実は「西部劇映画」ではなく映画史初期の純然たる「列車映画」だと断じてきたエドウィン・Ｓ・ポーター監督の『大列車強盗』（1903年）について、映画テクストと上映形態の複合的分析を通じて、本作はむしろ「列車映画」であるがゆえに重要な「西部劇映画」たりえたという新説を提示した。第4章では「西部劇の重鎮」として知られるジョン・フォード監督の最高傑作映画『捜索者』（1956年）について、本作のモニュメント・バレーの岩石砂漠のなかには、地中海のような多島海のイメージが込められているという先例のない動画映像解釈を提示した。膨大な先行研究を有するフォードの西部劇を対象に、以上のような独自の解釈を組み立てたことの卓越性は、この元になる論文が審査員の満票を得て第3回（2010年度）日本映画学会賞受賞論文に選出されたことからも明らかである。

もっとも、本論文が広い知的射程を持つ半面、さらなる精緻化の余地を残していることも事実である。鉄道産業時代から航空宇宙産業時代へといたるアメリカの国家産業イデオロギーの一貫性と断絶については、膨大な歴史的資料を駆使したより具体的かつ鮮明な説明が必要であるし、西部劇とSF映画のジャンル的混淆についてもより多様な実例を引いてさらに傍証する必要があるだろう。また筆者が西部劇の根源にあるとする「文明」対「未開」のテーマは、米国史だけでなく世界史の文脈のなかでも再考されねばならないだろう。

とはいえ、本論文がフロンティア概念の多様な展開の内に西部劇映画の画期的考察を達成し、映画学とアメリカ研究の未来に対して数々の有意義な示唆をもたらした、国際水準においても、きわめて高度な学際研究であることは疑いを入れない。また本論文は、人間精神と社会と芸術の錯綜した関係の総合理解をめざす共生人間学専攻、人間社会論講座の理念にふさわしい内容を備えたものと言える。

以上の評価を総合し、本論文を博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また平成25年1月22日、論文内容とそれに関連する事項についての口頭試問を行なった結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降